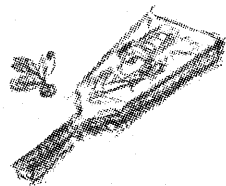


## 白石トク先生をお訪ねして

「来年は、日本の幼稚園百年にちなんで、長年幼児教育にたずさわっていらした方々のお話をうかがう、というのはどうでしょう。」

編集会議でこの話合いがもたれて、経験の浅い、世間知らずの私の存じ上げない方々のお名前がたくさん候補にあがりました。企画としても大賛成、その上好奇心旺盛な私は、ぜひそういう先生方に直接お目にかかってお話をうかがいたいと思いました。そして候補者の中から、単純に「以前原稿もお願いして直接お目にかかったことのある黒田成子先生のお母さま」ということで、さっそく黒田先生を通して武蔵野相愛幼稚園の白石トク先生に、お話をうかがいたい旨をお願いいたしました。黒田先生からは折返し「もう少し涼しくなったら」とお引受け下さるとのお返事をいただきました。

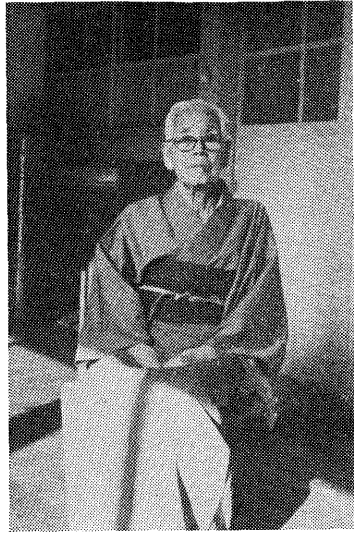


## 赤間峰子

九月に入ってからさすがに朝晩秋風を感じるようになった九日、朝から東京には珍しい青空が見られました。私は、黒田先生が送ってくださった地図を頼りに相愛幼稚園に白石先生をお訪ねいたしました。白石先生は、初め、黒田先生のお宅で……ともお思いになったようですが、やはり幼稚園の方が白石トクという一人の人間の背景を見ていただく意味でもふさわしいとおっしゃった由、私ももちろん幼稚園を拜見したいと思っていましたので楽しみにこの日を待っていました。

玄関を入ると、幼稚園の先生方、黒田先生が迎えて下さり、玄関からつづいた広い保育室の真中に子ども用の机とすが用意されていて、上品な和服姿の白石先生が出ていっしやいました。先生は開口一番

「こんなに腰が曲って……。」と笑いながらおっしゃいましたが、腰の曲っていらっしやること以外は、私が「わが半生の日記」を



(撮影 赤間峰子)

拝見して想像していた通りの方でした。お年に似合わず物をはっきりとおっしゃって、またそのおっしゃることがなかなかユーモアがあるのです。これこそ保育者として最も大切なことの一つだと私は思います。

私はうかがう途中の電車の中で、あれもうかがおう、これももうかがおうと思っていたことが何となくスムーズに出てこなくて、やはり、日記を拝見して以来憧れていた先生の前へ出て、大分あがっていたのだと思います。先生は「私は、恐い、きびしいばあさんだと思われているですよ」と笑いながらおっしゃいました。が、不思議と私は、「恐い」という感じはもちませんでした。む

しろ、とてもなつかしいような、何でもお話できる、そういった感じのおやさしいおばあさま、でした。

どうも聞き手が下手なせいとか、先生が聞き上手でいらっしやるのか、何だか私のおしゃべりの方が多くなってしまうたようので、気がついた時には多分三時半を回っていたと思います。そそっかしい私は時計もたず、何う時間だけはキチンとしたいと駅で時計を見て、大体お約束の一時半にうかがったつもりなのですが……。さぞ先生はぶしつけな私の訪問に、お疲れになっただろうと今になって反省しています。

まず先生は、「私はせっかちだから」とおっしゃって、私に下さるために用意しておかれたと、「わが半生の日記」を一冊（私が津守先生から拝借して読ませていただいたと申上げたことを覚えていて下さって）と、その後編ともいふべき「おのが日をかぞえて」（これは限定自費出版されたもので、その最後の一冊のこと）、そしてそのほか白石先生ご自身のこと、相愛幼稚園のことを私が理解するようにと二、三の資料と、その上私の娘へのお土産を可愛らしい手さげ袋に入れたものを下さいました。娘への土産というのは、私が九月号にメキシコのマリアさんから娘にまで土産をいただいたと書いた、それをちゃんと読んで下さっ

て、やはり手作りの外国製の小さな敷物でした。茶と黄を基調にした暖かい感じの毛糸製です。この細やかなお心づかいですが幼稚園の先生、と感心しましたところ、*「さあ、どうぞ、これでおわり。始めましょうか」*とニコニコと、ケロツとしておっしゃるのです。私もつられて、さっそく先生が幼稚園を始められた動機について伺いました。きつと、故白石牧師と結婚されて、神の子である人間の、そのまた幼いものに早くから神さまのことをわからせたいとお思ひになったのでは……と、私はいわずもがなのことをいいました。ところが、先生は、じつと聞いていらして、*「ちがいます」*とはつきりおっしゃいました。そして次のように話して下さいました。

*「私は島根県の人間です。そして私が四歳のころまで、幼稚園などというものはありませんでした。（先生は一八八六年生まれ）でも四歳になった時、島根県立師範学校に附属幼稚園の前身ともいべき幼児保育の場所が設けられました。しかし当時のことで官尊民卑の時代ですから、とても私どもが幼稚園へ行けるものはありませんでした。しかし私の父はとても教育熱心な人で、まあ今でいえば教育パパでした。私に十四、五歳の子守女をつけて、その幼稚園に通わせてくれたのです。幼稚園は平日でした。毎日の幼稚園通いはなかなか疲れる仕事でした。しかしその*

時の幼稚園の先生、その方に私は憧れて、『ああ、私も幼稚園の先生になりたいなあ』……それが私がこの道に進んだ理由です。ともかくそんな小さい時分から、なりたくてなりたくてたまらなかつたのが、幼稚園の先生なのです”

私は、先生のお話をうかがって、何か胸がときめくような感じがしました。そして先生が夢を見るようなお顔をなさって、

*「幼稚園の何が楽しかったかって……遊ぶことが楽しかったのですよ。桜の花びらがヒラヒラ舞う庭で、黒被布を召した先生、（未亡人が何かだったのでしょう、もちろん当時の私にはわからないことですが）が手風琴、アコーディオンじゃないんですよ、で『さくらあ、さくら』と歌って下さった」と先生ご自身も小さい、細いきれいな声で歌って下さいました。本当に、私も夢のようにでした。そしてなおも先生は、*

*「幼稚園はこんなに楽しかったのですが、家へ帰るときびしくて、父は『きょうはどんなことをしてきた』と疲れて帰った私にいったりします。そして、やれ、たたみのへりをふんだらいかん、はき物のぬぎ方が悪い、などそれはそれはきびしい人でした。*

そして当時女の子は小学校を出ると裁縫の塾へ行つて、そのかたわらいろいろない古をするのが普通でした。私も十四、五歳

までに、和歌、お花、お茶、などいゆるみやびごとをさせられました。それから英語も父は習わせたかったのですが、これは先生が夜でない時間帯がおとりになれず、女が夜出るなどということとはとんでもないことですから、父が仮名でイット・イズなんとか、などと書いてある本を買ってきまして、それで勉強させられたりしました。

でも私はどうしても女学校に行きたくて、父が親戚を説得してくれまして、やっと女学校一年に入學した時には、同年輩の友だちは四年生になっていました。おまけに私が背が高いものですから、同じ学年の方たちから見ればとてもおとなで、その上先生になりたかった私は、いつも先生のまねごとばかりしていました。

それから、先生になるのなら女子師範へ入った方がよいということで、女学校二年でやめ、女子師範学校の入學試験をうけました。師範を卒業後は八年間、小学校の教員をしておりました。ですからキリスト教のことも、神さまのことも、すべて結婚後に初めて知ったわけです。私が今でもきびしいといわれ、何事もキチンとしないと気がすまないというのは、この師範学校の教育のせいもあると思いますね。ご承知のように万事コチコチでしたから……。

私は、ご自分の幼稚園の時の憧れをもちつづけて、とうとうそ

の夢を実現なさったからには、いゆる「教育しよう」とか「子どもはかくあるべき」などという構えがおありにならないで、私から見れば理想的な道を通られたような気がする、と申し上げました。すると、

「ともかく子どもと遊びたかったです。そうしている内に、どうもこのやり方ではいかん、そんな『自由保育』とか大げさなものではないのですが、子どもを見ているところいうやり方の方がいいのではないかと、思えてきたのです。子どもに作品を持たせて帰すとか、そういう形にとられず、保育室の仕切りもとりました。私は別にそういう学問をしたわけではありませんが、アメリカにおりました時、初めて娘の成子を幼稚園に連れて行きました。前の日から先生へのご挨拶を英語で一生懸命暗記しました。ところが幼稚園に行きますと、出ていらした先生は、「ハロー！ ルース（黒田先生のアメリカでのお名前）」と成子の手を引いてあちらへいらしてしまつて、私は完全に無視です。

万事こういうふうな自由で解放的なアメリカのやり方とか、日本へ帰ってから旭川におりましたころは、倉橋先生の書かれたものを読みました。大きいものでなく、小さい文が多かったように覚えていますが、この方は男の方なのに、よく子どもと遊ぶ方だと思つて感心いたしました。そのほか、お茶の水の講習にも参り

ました。そして、だんだん先生方も遊びのことを理解して下さって、長山篤子さん（現在弘前大学）が十年間自由保育の実践をつづけて下さいました。

世間的な批難や誤解もありましたが、私は眼をつむってたえて、今日までできました。もう今では子どもたちの中にはいると、体力的にかないませんが、いつも子どもたちのそばにいたい、ほんとうに幼児と共に神様にお祈りしたいと思っています。”

先生のお話は乾いた土に水がしみこんで行くように私の心の中に入って行きました。最後に私は、私個人としてどうしてもうかがいたかったことをうかがいました。

“日本では宗教という仏教の家が多く、私の家もちろん仏教です。でも私は、偶然私のまわりに信者の方を多く見ているせいか、またいい保育をしていらっしゃる方にそういう方が多いせいか、保育とキリスト教の精神というものが放せない気がするのです。でも信者でもない、キリスト教のことを何も勉強してない私が、もし、幼児と一緒に遊ぶ場合、私にもそういうことが（キリスト教の精神をもった保育）可能でしょうか”

“もちろんできます。人間がどんなに進歩しようと、どんなに努力しようと、たとえば努力して一流の大学に入学できた。この場合も自分の努力だけではない、その上に大きな神さまの力とい

うものがある。ということがわかっていけばいいのです。先だつて読んだものの中に、いいことが書いてありましたよ。日本は明治維新の時に西洋の文明を何でもとり入れた。知識技術の面は進歩したが忘れていた面があるとありました。私が思うのにすべての根源である神さまのことをおいてきぼりにしたのだと思えます。まことにそうです。今はまさにそれを求める時になったのじゃないですか？ 心のうるおいですよね”

このほかにも私はいろいろ、おもしろいお話、ためになることをうかがいました。でも私は思うところあってテープレコーダーを持って行きました。途中で（ことに先生のお歌など）あ、やっぱりテープレコーダー持ってくるのだったな、と思うこともありました。その上お話をうかがうことに夢中でメモもわずかしかたってありません。でもこのすばらしい、白石トク先生のことを一人でも多くの皆さまにお伝えしたいと、帰ってきてその夜、印象のうすれない内に、としたためました。秋晴れの一日の記録がおそらく一月号にのるのではないかと思います。寒い冬に秋晴れをなつかしみ、まことに秋に咲くりんとした菊の花のような白石先生を思っていたかと思えます。

一九七五・九・九、重陽の節句の日